

国境バリアに対する地域の応答

——欧州難民危機をめぐるトリエステとイストリアからの報告——

鈴木鉄忠*

Responding to Border Barriers: Report of European Refugee Crisis and Anti-barrier Protest in Trieste and Istria

SUZUKI Tetsutada

This paper examines the reactions of local inhabitants to the European refugee crisis and describes the protests that have occurred at the border barriers in Trieste (Italy) and Istria (Slovene and Croatia). Since 2015, the refugee crisis has posed a dilemma that has challenged Europe's liberal democratic ideals. The paper will first elucidate the manner in which the border blockade was built in Istria in December 2015 and how the local representatives who gathered in Trieste decided to protest against the border barriers. Next, the paper will detail the conditions observed at the site of the border blockade that occurred in September 2016 between Slovenia and Croatia. The barbed wire fence still remains along this border and the local inhabitants are witness to the events that have unfolded. One of the findings of the paper is that Istria's protests against the establishment of border barriers evince that there is not much discrepancy between perspectives and judgements of ordinary citizens and their political representatives.

キーワード：国境地域，ヨーロッパ難民危機，トリエステ，イストリア，フィールドワーク

【目次】

1. 欧州難民危機と国境バリアに応答する国境地域の人々
2. トリエステからの報告——2015年12月，国境バリアと抗議の始まり
3. イストリアからの報告——2016年9月，国境バリアの継続
4. 国境地域から現代社会を読み解くために

* 共愛学園前橋国際大学国際社会学部専任講師

1. 欧州難民危機と国境バリアに応答する国境地域の人々

本稿は、ヨーロッパ国境地域のフィールドワークをめぐる共同研究と個人調査のなかに位置付けられる。中央大学社会科学研究所の共同研究チーム「惑星社会と臨床・臨場の智」では、国家の「周辺」「端」とされる“国境地域／境界領域”のフィールドワークを進めてきた。そのなかで、いかにして惑星社会のジレンマをトータルに認識するか、そしてジレンマに応答する智をいかに把握するかという問いを据え、フィールドの「細部把握」からの理解を試みてきた¹⁾。また筆者の個人調査テーマ「国境の市民化」では、ポスト冷戦期以降の国境の軍事化・国有化・国民化のうごきを問い直すような、国境地域の人々の国境を越えた行動と語りに着目してきた。そして「国境の市民化」をめぐるローカルの重層的展開を、ボトム・アップに明らかにすることを目的としてきた²⁾。

以上の調査研究を背景として本稿が着目するのは、ヨーロッパ難民危機と国境バリアの設置をめぐる国境地域の人々の応答である。なぜ着目するのかといえば、2015年以降に深刻化した移民・難民危機は、ヨーロッパの掲げるリベラル・デモクラシーの理念を根底から覆すほどのジレンマをいまなお突き付けているからである³⁾。そこで本稿の主眼は、難民危機のジレン

1) これまでの共同調査研究の主な成果は、次の3つにまとめられている。新原道信編著、『“境界領域”のフィールドワーカー“惑星社会の諸問題”に応答するために』中央大学出版部、2014年。新原道信編著、『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部、2016年。新原道信編著、『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部、2019年。

2) トリエステとイストリアの南東ヨーロッパの国境地域、そして沖縄八重山の国境島嶼に関する個人調査研究の主な成果は、主に次の論稿にまとめられている。鈴木鉄忠「境界領域としてのヨーロッパ試論—イストリア半島を事例に」『中央大学社会科学研究所年報』第17号、2013年、133-151ページ。鈴木鉄忠「国境の越え方—イタリア・スロヴェニア・クロアチア間国境地域『北アドリア海』を事例に」新原道信編著、2014年、前掲書、189-232ページ。鈴木鉄忠『「帝国の未精算」としての国境問題に関する一考察』大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋研究センター年報』第13号、2016年、9-16ページ。鈴木鉄忠『「帝国の解体期」における日本とイタリアの国境問題—紛争解決論による沖縄とトリエステの比較分析』大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋レビュー』第13号、2016年、30-45ページ。鈴木鉄忠「国境地域における『平和裏の戦争状態』—“うごきの比較学”からみた『非常事態』の考察』『中央大学社会科学研究所年報』第22号、2018年、33-49ページ。鈴木鉄忠「国境島嶼における『平和裏の戦争状態』—同時代のことに応答する石垣島の反基地運動」新原道信編著、2019年、75-154ページ。

3) ブルガリア出身の政治学者のイワン・クラステフは、難民危機はヨーロッパにとっての「9.11」(2011年9月11日にアメリカで発生した同時多発テロ)であり、「唯一、真の欧州全体の危機であり、欧州の政治的・経済的・社会的モデルに疑念をもたらしている」と述べている(I.クラステフ、庄司克宏監訳、『アフター・ヨーロッパ—ポピュリズムという妖怪にどう向きあうか』岩波書店、2018年、22ページ)。この危機の根底には、ハンナ・アーレントがかつて指摘した「人権のアポリア」が今なお未解決であることを示しているように思う。これは「生まれつき万人に与えられ、誰からも奪われないもの」とされた人権宣言の普遍的な性質が実際に行使可能かどうかは、当人が何らかの政

マに関する分析や考察というよりも、その1つ前段階の作業を行うことにある。つまり、現地で何が起こったのかを記述し、そこでの報告と理解を残すことに重きを置いている。ヨーロッパの理念を根底から揺るがすことになった移民・難民危機とそれに伴う国境バリアの設置という事態に対して、地域の人々がどのようなことを感じ、考え、行動したのか。調査者の特定の立ち位置や視点を含めた報告を残しておきたい。

本稿の取り組む問いは、＜ヨーロッパ難民危機とそれに伴う EU 域内における国境バリアの設置を、トリエステとイストリアの人々はどのように受け止め、理解し、行動したのか＞である。一連の事態の背景として、2015年11月11日、スロヴェニア外相は、中東とバルカン半島からの「移民による制御不能な通行と離散をあらかじめ阻止する」として、スロヴェニア北東部でクロアチア領と接する国境柵上に鉄条網フェンスの設置を決定した⁴⁾。さらに1か月後の12月11日、鉄条網フェンスの設置を南西部のイストリア地方にも設置する措置を決め、翌日に実行した⁵⁾。イストリアおよび周辺地域の人々は、これまで存在しなかった国境沿いの有刺鉄線の出現に突如として直面することになった。筆者は別の調査研究の目的でトリエステに滞在していたのだが、現地の人々が国境封鎖に対して応答を試みる場に偶然に居合わせることになった。

そこで次章では、2015年12月の国境封鎖がどのように始まり、トリエステに集まったイストリア地域の代表者たちがどのように応答したのかを当時のフィールドノートから再構成していく。そして3章では、国境封鎖の始まりから9か月後の2016年9月、撤去されないままの有刺鉄線の残る国境の現場はどのようにになっているのか、そして現地で生活する普通の人々はどのようにこの事態を見ているのかを示す。

2. トリエステからの報告——2015年12月、国境バリアと抗議の始まり

「欧州難民危機」とよばれた2015年、ヨーロッパには130万を超える人々がEU域内に到着し、庇護申請を求めた。中東からトルコを通じてEUへ渡る「バルカンルート」は、シリアの政情不安から逃れた難民や移民の主要ルートであったが、2015年9月のハンガリーを皮切りに、

治的共同体に帰属している場合のみに限られる、というジレンマである（H. アーレント、大島通義／大島かおり訳、『全体主義の起原2 帝国主義』みすず書房、1972年、270-290ページ）。第2次世界大戦期にアーレントが洞察したこの難問は解決されず、現在再び出現しているのではないだろうか。2015年のヨーロッパ難民危機は、「諸権利を持つ権利」をはく奪された難民の人々に対して、ネイション以外に実効的な策を講じる政治主体が「リベラル・デモクラシー」のヨーロッパに不在であることを露呈した。そうした人権の普遍的性質と権利行使の個別事情のアポリアが表面化する1つの現場が、国境地域や国境島嶼である。

4) 2015年11月12日『人民の声』より。なお『人民の声 (Voce del Popolo)』の記事は、次のサイトから閲覧できる (<http://lavoce.hr/> 2019年3月15日アクセス確認)。

5) 2015年12月12日『人民の声』より。

中東欧の EU 加盟諸国は移民・難民の流入を阻止するための国境バリアを相次いで建設した。こうした一連の政府の措置に対して、イタリア・スロヴェニア・クロアチアにまたがる北アドリア海の国境地域では、のちに述べるように、2015年12月から自発的な抗議行動が沸き起り、1か月にわたって国境バリア反対のデモが続いていくことになった。

本章の記述は、スロヴェニア政府によるイストリア地方の国境バリアの設置とそれに対する抗議が本格的に始まる間に位置する12月14日から16日にかけてのトリエステからの報告である。

厳戒態勢のヨーロッパ

2015年11月13日にパリで起きた同時多発テロから約1か月、ヨーロッパの空港のセキュリティは、想像通り強化されていた。ローマ・フィウミチーノ空港では、EU市民一人一人に対して厳格なパスポートチェックが行われていた。以前はシェンゲン条約により、EU市民は、入国審査に行列をつくる非EU市民を横目に見ながら、パスポートのチェックなしでゲートを素通りできていた。しかし今回は立場が逆転しており、EU市民の列の方がはるかに長く、顔をしかめたり不満を口にしたりするEU市民からやり場のない憤りが伝わってくる。

12月14日、トリエステのロンキ空港にはほぼ予定通り22時40分に到着した。今度は「外国人」が、空港警備隊に呼び止められ、荷物検査を促された。「居住地はイタリアか？」と尋ねられ、それ以外の詳しい説明はないまま、私たちはパスポートを一時的に没収された。検査の対象とされたのは、スロヴェニア出身の若い男子大学生、スペイン出身の学生ふうの女性、私を含めた数名の日本人の乗客だった。数分ほどして事務室から戻ってきた警備隊は、何の説明もせずにパスポートを返却した。こうした“抜き打ち検査”は、トリエステのロンキ空港を10年以上利用して初めて体験だった。

翌日の12月15日の早朝、売店でトリエステの地元紙を買い求める。朝食を取りながら新聞に目を通す。驚いた記事は、「イストリアに新たな分断。反移民のためのバリア建設。文化団体は鉄条網反対で団結する」という、やや小さめだが第1面に掲載の記事だった（写真-1）。ついにイストリアでも国境バリアの建設が始まったのだ。見出し横の写真には、草原に有刺鉄線が映っている。写真提供者は、スロヴェニアのジャーナリストですぐれた歴史家でもあるステファノ・ルーザ氏だった。地域欄の詳しい説明には、数日前にスロヴェニアとクロアチアの国境に位置するイストリア半島のドラゴニャ付近に有刺鉄線のバリアが建設されたこと、EU域外からの移民流入の阻止を目的としてスロヴェニア政府が決定したこと、すでに武装をした国境警備隊が派遣されていること、これら一連の有刺鉄線の設置に対してイストリアの博物館の代表者やイタリア・マイノリティ文化団体が反対の声明を発表した、と説明があった。

数か月前からハンガリーを中心とした東欧中欧諸国は、シリアからの移民・難民を阻止する



写真-1 国境封鎖を伝える 2015 年 12 月トリエステ地方紙の見出し

国境の建設を強行していた。とはいえ、いわゆる“西側諸国”とみられているイストリア半島でそれが起きるとは、私には思えなかった。だがヨーロッパの世論の風向きが大きく変わったのが、11月のパリ同時多発テロ事件だった。その影響が有刺鉄線の設置というかたちでイストリアに具体化したのだ。ヨーロッパと非ヨーロッパの“扉”だった国境が急速に“砦”と化していく。しかしながら、“砦”の建設に反対する地域の人々の抗議の声があることも事実である。

トリエステ市庁舎での「重要な会合」

では現地の人々はどうのようにみているのだろうか。トリエステに滞在する度に会ってよく話をするジャーナリストで友人のピアッジョ・マニーノがメッセージを送ってくれた。15時にトリエステ市役所で「重要な会合」が開かれるので、それに来ないかという誘いだった。彼のメールによれば、トリエステの現市長で民主党（PD）のコソリーニ、そしてフリウーリ・ヴェネツィア・ジューリア自治州知事でPDの「救世主」として現れたデボラ・セラッキアーニといった地元の有効な政治家たちが出席する予定だという。そのなかには政治家だけでなく、チルコロ・イストリア文化会代表のリヴィオ・ドリーゴさんのような、イストリア地域の市民団体の参加も見込まれているとのことだった。

しかし奇妙だ。というのも、地域で見れば最も重要な公的立場にいる政治家たちが一堂に会する会合なのにもかかわらず、本日のトリエステ地元紙に何の記事も載っていない。とにかく直接行ってみることにした。

15時、トリエステ市庁舎のあるイタリア統一広場に到着した。市庁舎の入り口には、ピア

ッジョの他に、ジャーナリストでイストリア関係のイベントには必ず取材にかけつけるロザンナ・ジューリチンの2人が建物の内へ入ろうとしていた。それを見つけた私は走って入口の扉をくぐる。すると市庁舎の受付の女性に「何の用ですか？」と怪訝な表情で尋ねられる。階段を上っていたピアッジョを呼び止めて、彼の知り合いだと伝え、受付人は中に通してくれた。どうやら本日の会合は、関係者以外の立ち入りを禁止しているようだった。

ピアッジョはスーツに革製のバックをもち、いつになく正装をしている。再会の挨拶を交わすと、「いいときにトリエステに戻って来たね。今日の会合はとても重要なんだ」とピアッジョは言う。何が話されるのかを尋ねると、「実はよくわからないけど……」と言って笑う。ともかくにも、市長や州知事が集まるのだから重要な会合なのだろうということは想像できた。

会合場所に指定されたのは、トリエステ市庁舎の「青の部屋」という、30名ほど入れば満員になるような小会議室だった。部屋や廊下には、トリエステが最盛期を迎えた18世紀から19世紀の黄金の時代を物語る近代絵画や豪華な装飾が展示されている。まだ誰も部屋にはいなかったが、市役所の職員らしき人が会議室の入口付近にいてほしいと言うので、ピアッジョと私は立ち話をしながら時間の経過を待った。

15時を過ぎると、続々と人が集まってくる。10名以上が集まり、出席者の一人一人に対して、コソリーニ市長は親しげに挨拶を交わす（翌日の地方紙の記事によると、出席したのはイストリア州の副知事、イストリア州の自治体のブーイエ、ウマゴ、チッタノーヴァ、グリジニャーノ、ヴェルテネーリオの市長ないし副市長、トリエステ県の自治体のムッジャ、ドリーナの市長だった）。場の雰囲気は終始くつろいだものであり、リラックスした様子で挨拶を交わしている。

リヴィオ・ドリーゴさんは、正装とはいかないが、黄色のセーターの上に黒いマフラーを首からかけ、いつもよりフォーマルな格好をしていた。その他の人々も、正装かセミフォーマルの格好で、挨拶を交わす。新聞で見たことがあったり、実際にお会いしたことがあったりした人もいた。そのなかにイストリア州の副知事のジュゼッピーナ・ライコさんもいらした。ライコさんも私のことを覚えていて下さり、お互いに挨拶を交わした。ムッジャ市長のネスベデックさん、チルコロ・イストリア文化会の創始者の1人であるマリーノ・ヴォーチさん、他にも名前はわからないがお見かけしたことがある男性などがある。私でさえこれだけ知っている人がいるのだから、参加者同士は顔と名前が完全に一致する間柄だろう。参加者の共通点は、国境をはさんだ協力に関して理解がある人々ということになる。

「青の部屋」には、15脚の椅子が中央の木製テーブルを囲んで円形に配置されている。コソリーニ市長は、親しい友人を自分の家に招いたホストのように、「どうぞみなさん、好きな席におかけください」と言う。座席はあらかじめ指定されているわけではなかった。だが中央にあたる席にコソリーニ市長が座り、その隣にはイストリア州副知事のライコさんが占めた。市

長と州副知事の2人を輪の中心点としながら、背もたれがある座席には本日の会合に招かれたトリエステやイストリアの首長たち、そしてイストリアの市民団体の代表者たちが座る。「取材組」のピアッツォと私は、背もたれのない席を選んで、輪に加えてもらう。明日の新聞や広報用の写真のために、プロのカメラマンが場の様子をカメラに収めている。ジャーナリストのジュリチン氏も写真を撮り、明日の新聞記事の文章をタブレットで記入する。ヴォーチ氏は一眼レフのカメラで写真を撮り、「輪」の中心から1歩後ろの席に座った。

「自然に」決まった席の座り方から、本日の集まりがいくぶん推察できた。会合はフォーマルなものではなく、決められた席はなく、式次第もなく、話す人は手元に何も持たないで話すことになった。参加者の発言内容に加えて、話す順番やそのやりとりは、集まった人々が適切な距離を測りながらやるため、かえって互いの関係がよくわかるようだった。私は会合での発言をその場で聞きながらノートに書き留めた。以下はそのときのノートを基に再現した内容である。

国境を封じる有刺鉄線と国境を開く協働（写真-2）

会合はコソリーニ市長の挨拶で始まった。市長は、集まってくれた「友人たち」に感謝の気持ちを伝えた後、「今日はインフォーマルな形で、“おしゃべり (chiacchierare)” するような雰囲気、国境を越えた協働をスピードアップさせて推進していきたい」と切り出す。この「協働 (collaborazione)」はその後も何度も出てくるキーワードであり、まさにこの地域で国境を接する3つの国家の地方自治体と市民団体の間で協力関係を具体化していこうという趣旨だった。そのなかで市長は国境を越えた協力のプロジェクトにも言及する。



写真-2 トリエステ市庁舎での会合。2015年12月15日筆者撮影

そもそも国境を越えた協働が本日の主題だったため、イストリア国境沿いの有刺鉄線の設置は、いわば予想外の事態だった。だがこの「隠れた主題」にも市長は触れた。「これは今日の話題とは想定していなかったが……」と前置きをした後、スロヴェニアとクロアチアの国境につくられた「バリア」についての懸念を述べる。

これは無意味だ。そんなことをしても難民の流れを止められないし、かえって悪影響だ。私たちはこれとは反対に、協働という機運のなかで、国境のバリアを一刻も早く撤去するよう働きかけ、地域の統合を進めていくこと、この地域を一つのものとしていくこと、そして国境を越えた協働を進めていきたいと思う。

トリエステの市長のこの発言を皮切りに、その後の発言も互いに協力を求め、事態の打開に向けた具体的な方策を探る方向に「おしゃべり」は向かっていった。

トリエステ市長の次に発言したのは、イストリア州副代表のジュゼッピーナ・ライコさんだった。市長の隣に座っているので、ある意味では「当然」の順番だっただろう。彼女は、本日の招待にイストリア州の代表として感謝の意を示し、国境を越えた協働の推進に賛成であること、国境の有刺鉄線を「よい目でみてはいない」と表明した。

ライコさんの発言の後、誰が次に話すか様子見の雰囲気があった。そこに「一言だけ述べたいのだけど……」と言って話し始めたのが、チルコロ・イストリア文化会の代表ドリーゴさんだった。ドリーゴさんは本日の会合への感謝の気持ちを述べ、国境を越えた協働をトリエステが公的に本腰で進めていくことを「私たちがずっと待ち焦がれていたことだった」と心底から語った。「初めて」という言葉を繰り返し述べ、トリエステとイストリアが良好な関係を築く期待がもてる政治決定が、まさしくトリエステ市からなされた意義の大きさを強調する。そしてイストリア歴史研究所（IRCI）等と協業を通して、この地域の人々が共有できる歴史が書かれることを望むと語った。

次に話をしたのが、トリエステ市長やドリーゴさんに促されるように指名されたマリーノ・ヴォッチさんだった。後にピアッジョから聞いた話では、今回の会合の実現に向けて実質的な働きかけと根回しを行ったのが、まさしく彼だった。ヴォッチさんは1980年代から現在まで国境を越えた交流を主導してきた人物だ。グルッポ85（トリエステのスロヴェニア系マイノリティ文化団体）とチルコロ・イストリア文化会の名前を挙げながら、市民のレベルで協業が進められてきたことを伝える。

私が思い出すのは、1990年代初頭、この地域の歴史を子供たちに知ってもらうために、小学校を訪問することさえ本当に難しかったことです。しかし今は、そうした取り組みが

ようやく受け入れられるようになってきた。もっとも意義深い取り組みは、フォルム・トミツァ〔年に一度トリエステやイストリアで開催される、イストリア出身の作家フルヴィオ・トミツァの作品をめぐる連続講演会〕だと思う。トリエステからイストリアまで、イタリア、スロヴェニア、クロアチアの3か国にわたって一つの催しを開き続けてきたということは、きっと今に生きている。このような活動をこれからどんどんやってほしい。

次に話を始めたのはイストリア歴史研究所の代表だ。研究所はここ数年、組織内部の問題で活動が停滞し、代表者のポストも決まらず空席のままだった。本日の集まりに参加した教養のある雰囲気をもった小柄の高齢の男性は、ようやく選出された研究所の代表であり、国境を越えた協働に理解がある人で、愛国主義団体とは一線を画し、チルコロ・イストリア文化会なども近い立場にいる人物だ。個人的な記憶と現在の事態を重ねて次のように語った。

私たちは、お互いに連絡を取り合い、協働を推し進めることを何より優先する。イストリアに張られた有刺鉄線などいままで見たことがない。ショッキングな光景だ。私たちは「難民になる」ことを肌身で知っているはずだ。そうした人々を受け容れるには何ができるかを考えなければならない。

その後はイストリア地域の自治体の代表者たちが順番に口を開く。そして話は具体的なメッセージを表明することへ向かっていく。「明日に国境封鎖に反対するデモをする話が出ています。いかがですか？」とイストリアのある首長が全員に尋ね、「私たちもいくよ」「私はいけないけど、代理の人を必ず出す」「スロヴェニア側の市長にも声をかけてあります」「みなでそろって国境封鎖に反対の声をあげることが重要だ」といった発言が続く。そして、有刺鉄線の設置への反対を全員で公式に発信することで決まる。イタリア系マイノリティ新聞の『人民の声』の記者は、「明日の新聞記事で伝える」といって市長たちの集合写真を撮る。

最後にトリエステ市長は、年明けの2016年1月中旬にもう一度集まり、具体的な取り組みを行うことを提案する。そして「何かサインをしよう」と述べて、本日の会合は終わった。コソリーニ市長の発言は、口約束ではなく、正式に書面を交わして、国境を越えた協働の事業を実現していくことを明らかに意味していた。

集まりが意味するものとは何か

こうして1時間ほどで会合は終了する。ビアッジョと私は近くのカフェに入り、先ほどの会合で話されたことをめぐって意見交換をする。この機会に私はいくつかわからなかったことを確かめる。

まず今回の非公式会合はどのような過程で実現したのか。ジャーナリストとして複数の筋から集めた情報に基づき、ビアッジョは「コソリーニ市長が招待したい人に直接案内を出したんだ。完全に非公式だけれども、当然、政治的な意図が明確にあるのは明らかだ」と説明する。新聞記事に公示などがなかった理由は、トリエステ市長が非公式を臨んだからだった。しかし新聞記者は同席していたので、明日の朝刊には掲載してほしいという意味だったことになる。

参加した団体にとってはどのような意味があると考えられるか。「チルコロ・イストリア文化会にとって、これは初めて政治的に選ばれたということの意味するよ。本来ならトリエステ市民大学（UpT）がこのような仲介的役割を果たすはずだった。トリエステ市民大学の関係者はちょうど2週間前、『イストリアから立ち去った人と残った人』という、ありきたりのテーマで会合を開催した。会場はほとんどガラガラだった。集まりでは『私たちは忘れられている』という門切り型の話が繰り返されたただけだった。それに比べて、チルコロ・イストリア文化会はこれまでずっと、国境を越えた協働を推し進めていくことを目指してきた。本日の会合に参加したすべてのメンバーがそのことを認識している。そうして協働の一躍を担う団体として選ばれたというわけだ」。トリエステ市政の方向性を共有できる唯一のイストリア避難民団体が、チルコロ・イストリア文化会だった。そしてチルコロ・イストリア文化会とつても、トリエステ市との正式な協力が創設から33年経過してようやく実現する始まりとなった。

この会合の陰の立役者となったのが、マリーノ・ヴォッチだった。「彼がコソリーニ市長に提案して、今回の会合を説得させたようだ」とビアッジョは言う。ヴォッチさんは、チルコロ・イストリア文化会とは一時期、険悪な関係だったと聞く。しかし今回の会合をみるかぎり、それはある部分で修復されているように見えた。そうでなければ同じ場所にチルコロ・イストリア文化会が呼ばれることはありえないだろう。ヴォッチさんもドリーゴさんもお互いに距離のある形で敬意を表していた。

もし今後、何らかの協定が正式に結ばれるとしたら、それはどのようなかたちで実現するのか。それを左右するのが今度の選挙だ。2016年の4月、フリウーリ・ヴェネツィア・ジュリア州では地方選挙が予定されている。現在、州、トリエステ県、トリエステ市いずれも中道左派の政権が担っている。しかし今度の選挙では、中道左派は不利だろうとビアッジョは見ている。「おそらく中道左派は選挙で負けるよ。それはローカルの理由ではなくて、ナショナル・レベルでの理由だ。いまの中道左派政権は支持率を大きく落としている。このままでは票が中道右派に流れる可能性が非常に大きい。トリエステでは前回の市長だった中道右派のロベルト・ディピアツァが立候補を狙っている。彼が勝ったらどうなるかって？ もちろん“中世時代”に後戻りだよ！」。

ビアッジョと別れ、アパートに戻る。帰路を歩きながら頭に浮かぶのは、日常性のなかで信頼と相互理解が生まれる、ということだ。これはいかにもありきたりな考えに思う。しかし、

これが政治的動員の確かな基盤になることは否定できない。トリエステ市庁舎に集まった人々は、これまで互いの存在のを知っていた。しかしイストリア国境への有刺鉄線の設置という「不意打ち」に直面する中で、同じ場所に集まり、顔と顔を付き合わせて言葉や表情を交わすなかで、これまでとは別の関係が新たに組み直された。

抗議の波と沈静化

スロヴェニア政府による国境沿いの有刺鉄線の設置は、イストリア地域の人々による抗議の波の引き金となった。12月15日に最初の抗議声明が発表され、トリエステの集まりに居合わせたメンバーも参加した抗議も含めて、約1か月の間に、7度の大きな集合的抗議が動員された。抗議には40におよぶ地方行政および市民団体や自発的なグループが参与した（図-1）。12月14日のトリエステ市庁舎に集まった人々が約束した抗議表明は、12月16日の抗議デモとして実現した（図-1のE2、写真-3）。

その後に何が起こったか。2つの点を手短かに述べておきたい。第1に、スロヴェニア政府による国境封鎖の翌日には「ここには一人の難民も通過していない」（『イル・ピッコロ』2015

	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	
	12.15文化機 関の抗議声 明	12.16抗議デ モ	12.17地方議 会の抗議	12.17組織団 体の抗議	12.17地方議 会の抗議	12.19祝祭的 抗議	1.7抗議デモ	合計
N1 イストリア地方の3博物館・美術館、 協会(HR)	1	0	0	0	0	0	0	1
N2 イストリア地方の2博物館(SI)	1	0	0	0	0	0	0	1
N3 イストリア州知事(HR)	0	1	0	0	0	1	0	2
N4 プーイエ市長(HR)	0	1	0	0	0	1	1	3
N5 ウマゴ市長(HR)	0	1	0	0	0	0	0	1
N6 ラニシエ市長(HR)	0	1	0	0	0	0	0	1
N7 ピンゲンテ市長(HR)	0	1	0	0	0	0	0	1
N8 グリジニャーナ市長(HR)	0	1	0	0	0	0	1	2
N9 ポルトレ市長(HR)	0	1	0	0	0	1	0	2
N10 エルベレコシーナ市長(SI)	0	1	0	0	0	0	0	1
N11 カボディストリア市長(SI)	0	1	0	0	0	0	0	1
N12 ビラーノ市長・副市長(SI)	0	1	0	0	0	0	1	2
N13 イゾラ市長(SI)	0	1	0	0	0	0	0	1
N14 アンカラノ市長(SI)	0	1	0	0	0	0	0	1
N15 トリエステ市評議員(IT)	0	1	0	0	0	0	0	1
N16 イストリア州議会(HR)	0	0	1	0	0	0	0	1
N17 イタリア国民協会(HR-SI)	0	0	0	1	0	1	1	3
N18 プリモリエーゴスキル・コタル州議 会(HR)	0	0	0	0	1	0	0	1
N19 フェイスブックグループ「鉄条網反 対」(SI)	0	0	0	0	0	1	0	1
N20 ボーラ書籍市(HR)	0	0	0	0	0	1	0	1
N21 民主主義協会(HR)	0	0	0	0	0	1	0	1
N22 ゴリツィア県知事(IT)	0	0	0	0	0	0	1	1
N23 ゴリツィア県内の6自治体の市長およ び4自治体の評議員と議員(IT)	0	0	0	0	0	0	1	1
N24 スロヴェニア文化会(IT)	0	0	0	0	0	0	1	1
N25 スロヴェニア組織連合(IT)	0	0	0	0	0	0	1	1
N26 チルコロ・イストリア(IT)	0	0	0	0	0	0	1	1
N27 スロヴェニア統一左派議員団(SI)	0	0	0	0	0	0	1	1
合計	2	13	1	1	1	7	10	35

注：列には抗議イベントを日付順に並べた。行には抗議に参加した組織団体レベルの行為主体を並べた。例えばN3-E2が1であるとは、イストリア州知事が12月16日の抗議デモに参加したことを意味する。

図-1 国境バリア設置への抗議を表明した組織団体とイベント（筆者作成）



写真-3 12月16日のイストリア現地紙が伝える抗議デモ

年12月13日)と現地紙は報じた。つまり、イストリアには「難民の大量流入」という事実はなかった。実態のないまま有刺鉄線だけが国境沿いに設置されたことが次第に明らかになっていった。スロヴェニア政府はイストリア地域全域での抗議を受けて、「国境封鎖は予防措置」などとして、正当化の根拠を変更していった。そして有刺鉄線の設置期限と発言した2016年春以降も設置を継続することを決めた。

第2に、国境バリア設置への集合的抗議は、2016年1月7日を最後に動員されなくなった。それ以降は国境封鎖に関する記事が現地報道から急速になくなっていった。そのため2016年のイストリアでは、ヨーロッパ難民危機という事実が実態の伴わないものだったにもかかわらず、有刺鉄線が設置されたままにされた。

3. イストリアからの報告——2016年9月、国境バリアの継続

イストリアに国境バリアが設置された2015年12月以降、EUレベルで移民・難民危機をめぐる大きな決定が下された。2016年3月のトルコとの合意がそれであり、中東からの移民・難民の流入を実質的に阻止、もしくは本国や第三国に送還することを可能にする取り決めだった。これによりEUは移民・難民危機によって突き付けられた問題を当面は「先送り」した。しかしイストリアの国境バリアは撤去されないまま残されることになった。

2016年9月、トリエステを再び訪れた際、イストリアの国境バリアの現場を訪れることにした。国境バリアがどのように設置されたのか、それがどのようなかたちで残っているのか、

国境地域の人々は国境障壁とそれに対する抗議をどのように感じ考えているのだろうか。そして、もはや動員されなくなった抗議をどう理解したらよいのか。

本章の記述は、欧州難民危機の1年後、そしてイストリアの国境バリアの設置から9か月が経過した時期であり、「危機」「国境バリア」「抗議」が沈静化して日常を取り戻したかにみえる時期にあたる。主に2016年9月15日のイストリアからの報告である。

ヨーロッパ難民危機後の日常

2016年9月12日、成田空港からイタリアに向けて出発する。空港での慣例行事からヨーロッパ社会の情勢について、いくつか推論できることがある。その1つが両替であり、現在の経済状況を如実に反映する。成田空港の銀行で両替をすると、レートは1ユーロ当たり119.44円であり、2016年2月の渡航時よりさらに円高になっていた。ふりかえてみると、2000年半ばは、1ユーロ当たり160～180円で推移していたので、この10年でユーロの貨幣価値はおよそ3分の1も下落したことになる。それと同時にヨーロッパでは物価が上昇している。トリエステのバスの初乗り運賃は、10年前は1ユーロに満たなかったが、現在は1.35ユーロだ。単純計算でいえば、通貨価値は3分の1下落したのに、物価は3分の1上昇した。ギリシャの通貨危機、リーマンショック、イタリアを含めた財政危機、そして移民・難民問題がヨーロッパを直撃した。EU経済の低迷とEU市民の生活苦がよくわかる。

もう1つは出入国審査だ。成田空港の出国審査には、日本政府の定めた制裁措置による北朝鮮への渡航自粛の張り紙、またシリア、イラク、アフガニスタンの危険度がレベル4だと記された張り紙が目につく。2001年9月11日のニューヨーク同時多発テロから昨日で15年が経過し、ますます不安定な地域が増えている感覚を持つ。両替とセキュリティは、グローバルな政治経済の情勢と多くの人々の日常生活に同時に影響を与える変数になっている。

トリエステのロンキ空港では、昨年のような厳しい入国チェックを覚悟していた。しかし拍子抜けしたことに、入国検査も荷物検査もなく素通りした。昨年の冬にうけた「抜き打ち」の厳重なチェックは嘘のようだ。空港の警備員は談笑していて、危機感をみじんも感じられなかった。

ロンキ空港からトリエステ市内中心部へ向かう23時20分発の最終バスに乗る。いつもは数名しかいない車内だが、今回は英米独圏からの乗客あわせて20名ほどが乗り、これほど多い乗客がいるのは初めてだ。このバスはモンファルコーネの工場を立ち寄らないので、以前よりも早い50分ほどで市街地のバスターミナルに到着する。こうしたルートの変更も、国内外からの観光客を見込んでのようだった。以前、トリエステは観光客の誘致に熱心ではなかった。しかし今はインバウンドの誘致に非常に力を入れており、トリエステの自治体もずいぶん変わったと感じる。

翌日の9月13日火曜日、早朝にタバッキで『イル・ピッコロ』と『ヴォーチェ』を購入する。目を引いたのは、先日日曜日にクロアチアでは国政選挙があったということだ。注目の選挙結果は、与党の中道左派が敗北し、現大統領は辞任した。代わりに中道右派が勝利したが、過半数には届かなかった。よって少数政党との連立が必須とのことだった。イストリア州ではイストリア地域政党（DDI）が3議席を獲得した。幹部の喜びの声が掲載されていることから、満足いく結果だったようだ。連立政権に入る可能性もあるという。

国境バリアの現場に行く前に、ジャーナリストのビアッジョと会って話を聞いた。イタリア統一広場で彼と待ち合わせし、旧市街地区カヴァーナ広場のカフェへ移動する。

スロヴェニアの国境バリアとそれへの抗議をめぐって、ビアッジョはこう話す。2015年12月と2016年1月の抗議では、この地域のすべての市長が参加した。有刺鉄線の撤去に全員が同意していた。「だけども少し難しい状況なんだ」と彼は言う。というのは、市長だった人々の何人かは、選挙の結果で政治の表舞台から姿を消した。そしてトリエステ市長でイタリア民主党（PD）のコソリーニは、選挙で敗北した。また、イストリア歴史研究所の代表は夫人の介護のため公的活動ができなくなっている。要所で人が抜けたこと、そして抗議をするための資源を調達し続けるのが容易ではないこと、ビアッジョはこの2点を挙げて、国境バリアに対する抗議が下火になったことを説明する。

まるで歯の歯が欠けたように、国境封鎖の抗議ネットワークのノードが外れていった。とくに2016年3月イタリアの選挙結果は大きな影響を与えた。中道左派に位置する政党が軒並み敗北し、代わりに中道右派やポピュリズム政党が票を伸ばした。これはイタリアのみならず、ヨーロッパ中で起こっている現象である。その構造的な背景には、「先送り」したが根本的な解決策を見いだせないでいる移民・難民問題が依然として強く影響している。

ヨーロッパの移民・難民受入れについて、「建前」と「本音」があるとビアッジョは解説する。「まず『建前』としては、『ダブリン規約』がある。これは移民・難民が最初に到着した国で入国登録を行うべきことを定めている。しかし実際は、これは守られているとはいいがたい。移民・難民の多くはドイツやイギリスを目指す。例えば、通過国となるイタリアは、登録しないかたちでの移民・難民の入出を黙認している。当然、EU域外に隣接するイタリアやギリシャには言い分はある。域外境界に隣接する国ゆえに、最初に移民・難民が到着するのは当然イタリアやギリシャになることが多い。そうした人々をすべて登録することなどできない。EUの内国に位置するドイツやフランスといった国々は移民・難民を受け入れることがなくなってしまう」。

ダブリン規約の「本音」と「建前」は、EUの移民・難民受入れの法的な（de jure）取り決めと事実上の（de facto）選別の大きなズレを表している。そしてダブリン規約の抜本的な見直しに着手できないまま、とりあえずトルコ合意で問題の先送りをしたことが垣間見えてくる。

なおイストリア避難民の活動はどうか。「どんどん活動は縮小している」とビアッジョは言う。「内容のない展望」ばかりであり、未来について人々をひきつけるようなことが語れないのが理由だという。さらに輪をかけてイストリア歴史研究所のなかで交付金の横領スキャンダルがあり、イタリア社会からの信用を落とした。そして経済不況により、アソシエーションまで資金が回ってこない。ポーラの避難民が発行していた『アレーナ・ディ・ポーラ』は、すでに交付金がストップしているというのだ。

2000年代、長らく忘れられていたイストリア避難民は、イタリアのメディアや公的舞台上で突如脚光を浴びることになった。この忘却と発見は、記憶のポリティクスとナショナル・アイデンティティの立て直しと連動していたが、いま現在「フォイベ」と「エンド」は、イタリア人の関心を急速に失ったように見える。1990年代以降、中道右派政党はイストリアの「悲劇の歴史」を政治的に利用することによって、イタリア・アイデンティティを作り替えようとした。そうして戦後以来の「ファシズムからの解放」とキリスト教民主の政治体制を掘り崩していった。だが2010年代以降に起こっているのは、ポピュリズム政党が「反移民・難民」「反EU」を掲げて「自国第一主義」のナショナル・アイデンティティを強烈に訴え、中道右派と中道左派の両方を攻撃していることである。同盟と五つ星政党の伸長は、この戦略が成功していることを示している。

「普通の人々」にとっての国境バリアと抗議——カルダーニャ（クロアチア・イストリア）

2016年9月15日の木曜日、私はトリエステからブーイエヘ向かった。スロヴェニア国境に隣接するクロアチア・イストリア州の町であり、国境に最も接しているのがカルダーニャ（Kardanja）という集落であることを知った。

トリエステを出発したブルマンは、思ったよりも早くスロヴェニア国境検問に到着した。ドラゴニャの国境検問は、スロヴェニアからクロアチアへの入国だけでなく、シェンゲン圏内から域外への移動になる。バスの中に国境警備隊が入ってきて、1人ずつパスポートを目視で確認する。国境警備隊は私を一瞥し、パスポートにスタンプを押しただけで処理した。他の国境検問も割合簡単なチェックで通過している。スロヴェニアから出ることは、シェンゲン圏内の外に出るということなので、出る分には管理は厳しくないのかもしれない。この一帯は緑の丘陵地帯になっているが、目当ての国境封鎖の鉄条網を車窓から目を凝らして見たが、それらしきものを見つけることはできなかった。

国境通過からほんの数分後、ブーイエ行きの道路標識が出ている交差点に差し掛かると、バスの運転手は減速し、隣のおばさんが「あなたはここで降りるのよ」と教えてくれる。だだっぴろい道路に一人降ろされ、心細さを感じつつ、日が暮れる前に宿を目指して歩く。途中でパトロール中だった警察官に急に呼び止められた。パスポートを見せるように要求され、いくつ

か質問をされた後、私は解放された。

無事に本日の宿に到着する。いわゆる「民泊」で、個人が所有している一軒家を観光客に解放しており、大手旅行サイトで予約した。宿の入口にはヴェネツィア共和国のライオンらしき石像が門番をしている。チャイムを鳴らして出てきた宿の女主人は、慣れている様子で、親切に宿泊のいろはを説明する。私がイタリア語を話すことを知ると、地元の人らしくイストリア方言のイタリア語でやりとりすることになる。

私がスロヴェニアとの国境を見たいと伝えると、携帯電話でタクシー会社に電話をかけて下さる。「国境を見たいという変わった人がいるのですけど……」という会話が耳に入る。現在、ここの国境はいわゆる生活や観光で通過することはあっても、それ自体を観る対象にはなっていないのだろう。女主人は明日の午前にタクシーを手配する交渉をまとめて下さった。

宿の女主人は、国境沿いの有刺鉄線は国境検問のあるドラゴニャではなく、カステルヴェネレという小高い丘からの方がよく見えると教えてくれる。丘陵になっているところには教会と墓地があり、眼下に河が流れていて、そのあたりに国境が引かれているのだと語る。「でも有刺鉄線はいまもあるかわからないですよ。もう撤去されているかもしれないですね」とも言う。宿からわずか1キロメートルしか離れていない国境だが、ここで生活と宿経営をしている人にとっては関心が薄いようだ。逆に言えば、国境バリアが日常生活に支障がないことを物語っている。

国境バリアの抗議について話を向けると、「当然知っています」と言う。先ほどと同じ調子で話す様子から、抗議は突飛なものではなく自然のものとして受け止められていることが伝わる。

他の地元の人はどうに思っているのか。民泊の宿は食事を提供していないので、歩いて数分のところにある食事処を教してもらい、そこへ向かった。バカンスの団体客を対象にした宿泊所を備えた建物で、かつての動物小屋をレストランに改装した造りをしている。イストリアの田園ではよく見かけるタイプの民宿兼レストランだ。

50名ほど収容可能な広々とした店のなかに、客は1人もいなかった。レジで簡単な事務作業をしていた女主人は、やや退屈そうに店番をしていた。私が入ると、親切に対応してくれる。席に通されるときに調理場をのぞくと、20歳くらいの若い男性が料理の準備をしていた。店内にはイストリア沿岸部の風景を描いたヨットや海の絵画が飾られている。女主人とは英語でのやりとりとなる。

食後に女主人と立ち話をする。2016年の夏の観光シーズンはどうだったかと尋ねると、今年は例年になく猛暑が続いたこともあり、いつもより観光客が多かったという。オーストリア・ハンガリー帝国時代に敷設されたパレンツォ列車の線路が現在はサイクリングコースになっており、それを目当てに北米やヨーロッパ各国から観光客が訪れる。昨日は13名ほどの団体の客が入っていたが、今日は宿泊客はおらず、その日その日によって客の入りに浮き沈みがある

とのことだった。

国境バリアの話の切り出すと、女主人は「このあたりに住んでいる人はみんな反対よ。移民・難民はここで見かけたことはほとんどないんですからね」と語る。「フェイスブックの投稿記事でみましたが、スロヴェニア人の2人が国境封鎖をした有刺鉄線を工具で切ったんですって。だけど有刺鉄線を切っている最中も国境警備隊は現れず、次の日になっても穴が空いたままで、誰でも通れるままになっていたとのことでしたよ。むしろ問題なのは有刺鉄線にかかった動物たちがけがをしてしまうことですよ。今は有刺鉄線とは別の材質に変わったらいいですけどね」と述べた。

国境検問のすぐ近くで宿やレストランを営む普通の人々にとって、国境バリアがどのように受け止められているか、いくつかの点を推論することができる。第1に、「実態なき国境バリア」である。もしスロヴェニア政府が主張したように大量の移民・難民が通過するならば、国境から僅かの距離で暮らしている人々がそれを目撃するはずである。宿やレストランといったサービスを提供する場所ならば、中東から何百キロも移動してきた人々が助けを求めることだってありうるだろう。しかし欧州難民危機が本格化してから1年が経過した現在、1人の移民や難民も見ることがないと言う。カルダーニャで宿やレストランを営んでいる人にとって、移民・難民が通過する事実はないにもかかわらず、国境バリアの設置は無意味であると話すのも納得がいく。2015年12月にトリエステやイストリアの自治体の首長たちの抗議は、イストリアの普通の人々の生活実感と多くを共有していたことがわかる。

第2に、「実感なき国境バリア」である。カルダーニャで宿泊飲食業を営む2人の女主人はいずれも、9か月前に設置された国境バリアやその抗議に大した驚きを示さない。この事件はもはや非日常ではなく、日常の出来事の一部となっている。自分たちの生活や経営には大きな影響を与えることはなく、最優先の事柄ではなくなっている。

第3に、国境バリアの有刺鉄線は、イストリアのツーリズムに有意な悪影響を与えなかった。正確に言えば、スロヴェニア政府はバカンスのシーズンに入る2016年の春頃、幹線道路から有刺鉄線が見えないように工夫と細工を施した。私も注意深く観察したが、ドラゴニャ国境は普通の国境検問と何ら変わらないように見えた。またトリエステの友人や知人の話でも、今年のバカンスでイストリアに行った人たちは40～50分の渋滞に遭い、国境検問通過の長蛇の縦列に困ったといていたが、それは普段とそれほど大差なかったという。国境バリアへの抗議の理由として、ツーリズムへの悪影響が挙げられていたが、そうはならなかったことになる。

第4に、国境バリアへの抗議は、少なくとも宿とレストランの女主人の二人の話では、ある理念やアイデンティティから発せられただけのものではない。つまり、移民・難民の人権保護や、国境を越えた協働を目指すイストリア性といったものが前面に押し出されるのではなく、「馬鹿げている」「不要だ」という日常感覚がまず先にある。市長や政治家は、そうした生活感覚

を人権や民主主義やイストリア性といったかたちで代弁したり、解釈して発言をしたりした。

では「国境バリアは馬鹿げている」という日常感覚を共有し、集会的な抗議が可能だったのは、なぜだろうか。第1の条件は、地域住民と同じ日常感覚をイストリアの自治体の長や政治家が共有できたからだろう。さらに、トリエステやゴリツィアの人々もそれを共有しているというのが興味深い。ここには北アドリア海地域の普通の人々の日常感覚と公的舞台上にいるアクターの知覚と評価の分類図式（ハビトゥス）が、あの瞬間にぴたりと合致したかのようだ。それが地域の潜在的な社会関係の結びつき（日常生活のネットワーク、社会文化的なつながり、国境を越えた協働にむけた願望）を通じて、抗議として可視化された。逆に、スロヴェニア政府の「国境バリア」措置がイストリア地域の人々の現実とズレていることが露わになった。

国境バリアの現場——カステルヴェネレ（クロアチア・イストリア）

2016年9月16日金曜日、6時に起床し昨日の日誌をつけた後、7時半過ぎには朝食をとるために外に出る。前日にレストランの女主人が教えてくれた付近のバールに行ったが、去年に閉店したという張り紙が貼っており、開いていなかった。仕方なく宿に引き返すときに、どうやら私の歩いている道は、前世紀に鉄道の線路のあった場所だったことに気が付く。標識には、「健康と友情のための道」と記されており、散歩やサイクリングを楽しむ目的で作られた。EUのINTEREG IIIの助成で実現したと説明があり、2004～2006年にスロヴェニア・クロアチア・ハンガリーで行われた越境協力プロジェクトで整備されたものだった。オーストリア・ハプスブルク帝国の遺産であるパレンツォ鉄道が、21世紀になってEUの越境プロジェクトで再生し、いまはイストリアの重要な観光資源になっている。すでにあった地域資源とEU支援という外部資金をうまく結合させたプロジェクトだったのだ。

予定通りに9時に予約したタクシーが宿前に到着した。タクシーというよりミニバンだった。宿の女主人が外に出てきてくださり、タクシーの女性運転手にクロアチア語で私の要望を説明してくれる。運転手もある程度イタリア語が話せた。カステルヴェネレで私を降ろした後、1時間後にまた同じ場所にタクシーは戻り、その後にブーイエに行くことで交渉はまとまる。料金は100クーナ（約1500円）だった。

目的地のカステルヴェネレは宿から車で5分もしないで到着する。私の降ろされた場所は、丘陵地帯の中腹に位置する集落の外れのようなところだった。すぐ目の前にはある程度の敷地をもった墓地があった。地名には「城」（Kastel）という名称がついているが、城らしきものは見当たらない。地理的には丘の上にあるので、宿の主人が言ったように、ここからスロヴェニアとクロアチアの国境線に位置するドラゴニャを見下ろすことができるようだ。墓地のすぐ傍は崖になっており、近づいていくと見晴らしのよい風景が広がる。

ここは「緑のイストリア」と呼ばれるだけあって、ワイン畑や緑豊かな景観が広がる。プロ



写真-4 スロヴェニア／クロアチア国境検問。クロアチア側から2016年9月15日筆者撮影

ーデルが描いた地中海の景観である。丘から見晴らすと、私の立っている丘と数キロメートル先の丘に挟まれた谷間になっているところに、国境検問が設置されていることがわかる。ここには谷や崖や河といった自然の障壁があるわけではない。小高い緑の丘のなかに平坦な耕作地が作られた景観があり、もし国境検問所がなければ、ここが二つの国家を分かち場所だと判断するのは難しいほどである。いわば地理的な視点で見れば、切れ目のない丘陵地域である（写真-4）。

ユーゴスラヴィアの解体とスロヴェニア・クロアチア両国の独立によって、1990年代半ば以降、ドラゴニャの陸地に国境線が引かれることになった。ここは両岸が丘に包囲されているため、軍事的な観点からすれば、防衛には全く適していない。つまり人為的にひかれた国境線である。さらにここは二国家の境界線であると同時に、シェンゲン圏と非シェンゲン圏の境界でもある。しかしながら、EUという単位で見れば、つながっている境界でもある。そして難民流入を警戒したスロヴェニア政府の国境バリアの設置は、人の移動の管理権を、EUではなく国家が握っていることを伝えている。

丘の上から国境検問の周囲を見ただけでは、何ら普段と変わらない景観である。しかしよく探すと、国境検問の東方に位置する一帯に、緑色のフェンスとその上に有刺鉄線があるのが確認できた。2016年3月には撤去するとスロヴェニア政府が表明していた有刺鉄線は、2016年9月現在、なお設置されたままだった。有刺鉄線は錆びついており、1年の経過を思わせる。よく目を凝らさないと見えないため、確かに目立つ存在ではない。しかし一度発見すれば、まるで外科手術で使った糸が抜糸されずに外に飛び出ているように、のどかな田園風景に異様



写真-5 スロヴェニアが国境沿い設置した有刺鉄線。2016年9月15日筆者撮影

な景観をつくり出している。まさにバリアであり，線であり，閉鎖であり，コントロールを象徴している。だが周囲には，畑をトラクターで耕している人の姿をのぞけば，国境警備隊が巡回している姿は見かけない（写真-5）。

国境検問所は，出国と入国いずれも数分単位で車が通過し，スムーズな流れである。厳しい通行チェックが行われているわけでもない。マスメディアが報道するような，難民・移民の逃避行など感じ取ることにはできないほど，のどかな時間が流れている。

墓地を訪れた（写真-6）。墓碑は国境線の移動以前からあった人間集団の歴史を証言している。20世紀前後に生没の記名がある墓碑は，イタリア語表記で刻まれている。そしてユーゴスラヴィアの時代になると，クロアチア語かスロヴェニア語でしか書かれていない。

10時になり，約束通りプルマンが戻ってくる。タクシーの運転手は男性に代わっており，朝に宿から送迎してくれた女性運転手の夫だった。ブーイエまであつという間に到着する。

ブーイエでは，イストリア州政府の関係者にインタビューを行った。50歳代の女性で，2015年12月のトリエステ市庁舎での集まりにも参加していたAさんだ。昨夜はイストリアで宿やレストランを営む普通の人々の意見を聞いたが，公的舞台上にいる人は国境封鎖をどのように受け止めたのだろうか。2015年12月から翌年1月の間に，イストリアでは国境封鎖への抗議が頻繁に組織されていたが，それ以降の特に2016年3月のトルコ合意以降，なぜ抗議が下火になったのか。

Aさんは，「私たちイストリアの人たちは，広場に出てデモをすることに，慣れていないわけではないのよ。そう何度もデモをできるわけではないの」と答える。さらに続けて「国境封鎖



写真-6 カルダリーニャの墓地。2016年9月15日筆者撮影

は“お笑い種”よ。イストリアに国境を作るなんて、無意味だからよ」という。この発言から、「デモに慣れていない」にもかかわらず、デモをせざるを得なかったところに「国境封鎖」がどれほど「お笑い種」で「無意味」だったか、また、イストリアの抗議がいかに「当たり前」ではない出来事だったか、がわかる。

Aさんは国境封鎖がいかに無意味かについて、個人的なエピソードを挙げながら説明する。「私が幼い頃のユーゴスラヴィアの時代、イストリアに国境なんてなかったわ。いまはスロヴェニアとクロアチアの国境で分け隔てられている場所に、よく買い物に行ったものよ。そういうなかで育った私にとって、話されている言語が変わることだって自然なことなのよ。それを国境で分けるという感覚はまったく異質なもののな」。Aさんの話は突飛なものではなく、この世代のイストリアの人々からよく耳にするエピソードである。

1時間ほどAさんに話を伺った後、タクシーでトリエステに帰った。今度は非シェンゲン圏からシェンゲン圏に入ることになる。ここでも、クロアチアからスロヴェニアの国境検問のチェックは通常と変わらず、国境警備隊から厳しいチェックはないまま通過許可がでる。しかし朝に見たように、ここから数メートル先には有刺鉄線が張り巡らされている。

2016年9月のトリエステとイストリアの国境地域において、「望ましい移民」と「望ましくない移民」の選別を体験することになった。前回のバリ同時多発テロの余波が残る2015年12月では、非EU市民のみならず、EU市民に対しても「望ましい市民」と「望ましくない市民」の選抜が行われていた。だが9か月が経過した現在、EU域内は「平常事態」を取り戻したかにみえる。その一方で、国境地域の現場ではEU域外からの入場者に対する管理が強まってい

るそこでは「望ましい旅行者」と「望ましくない移民・難民」の選別が前提になっている。線引きが変化したのだ。トリエステからイストリアまでの地域は、シェンゲン圏の内外の線引きがある。といっても、EU市民に加えて、私のような非EU市民であっても正規のパスポートをもつ旅行者は「望ましい通行者」として簡単に移動が認められる。しかし、パスポートを持たないものは「望ましくない通行者」と判断され、制度的にも物理的にも、シェンゲン協定圏のEU域内への入場の可能性は低くなる。「実態も実感もない国境バリア」であっても、ここに有刺鉄線が残っている事実がそれを象徴している。

4. 国境地域から現代社会を読み解くために

最後に問いと知見を確認して結びとしたい。本稿ではくヨーロッパ難民危機とそれに伴うEU域内における国境バリアの設置を、トリエステとイストリアの人々はどうのように受け止め、理解し、行動したのか>という問いを立て、それに対して2015年12月と2016年9月に実施したトリエステとイストリアのフィールドワークから答えることを目的とした。得られた知見として、以下の点が挙げられる。またあわせて今後の課題も指摘しておきたい。

第1に、国境バリアの設置に対するイストリアの抗議から浮かび上がるのは、普通の人々と政治の舞台にいる人々の感じ方と判断に整合性があるということである。このことは2016年9月のクロアチア選挙でイストリアの地域政党が同州で多くの票を得たこととも、一致している。一般の人々の民意を地方政治が代表し、たとえ国政と対立する争点でも地方政治が選択した抗議行動を一般の人々が支持する好循環が、イストリアにはまだ残っているともいえる。そうでなければ1度の大規模な抗議ですら実現するのは困難だろう。さらなる問いとしては、いかなる条件のもとで国境バリアの設置に対する抗議が可能になったのかが挙げられる。その1つの説明として、前回の拙稿で論じた複数の時間論を含めた枠組みによる理解を考えているが、今後の課題としてこの問いに取り組みたい。

第2に、国境バリアの現場のフィールドワークを通じて、国境の景観 (border landscape) から、3つの側面を読み取ることができる。

- 1) 国境地域 (borderland, terra di confine) : 自然環境、地理的な条件である。国境が人の移動の管理に成功するかどうかは、その位置する地理的条件に左右される。障壁に利する環境にもなれば、通行可能なルートにもなりうる。イストリアに確定されたスロヴェニアとクロアチアの国境検問は、あきらかに後者である。地理的に障壁となりえない場所に政治的に境界線を置くことによる矛盾が生じる。
- 2) 国境線 (borderline) : 人の移動をコントロールし、国境線の内側と外側を分離し、異なった規則を適用する。国境をめぐる政治と政策 (border politics and policies) が制度化

される。国境検問、国旗、国境警察、フェンス、ワイヤーがその機能を物質的に表現している。

- 3) 国境の生活 (border life), 国境地域の人々の歴史と物語 (history and story of borderlanders) : 国境の位置する地域における, 人間集団の歴史と物語である。共時的には, 宿やレストランを営む人々の日常生活と営利活動があり, 公的立場で活動する人々の生活と公務があり, 何らかの見方と分類図式を通じて国境の景観を解釈している。そして経年的には, 墓地のように, 国境が画定され, 変更され, 消去され, 再建造される政治のリズムとは別のところで, 家族やコミュニティを単位とした集団の歴史と物語が存在している。

国境地域のトータルな理解には, 観察可能な国境の景観から辿ることのできる国境地域, 国境線, 国境の生活が分節化されながらもひとまとまりになったものとして, 理解する必要がある。

第1の知見と第2の知見は, それぞれ国境地域のアクチュアリティの通時的および共時的な理解の方法だといえよう。

第3に, 国境地域に出現する国家の政治である。現地では「実態も実感もない国境バリア」にもかかわらず, それが撤去されないまま残されるという事実は, 何を意味するのだろうか。移民・難民問題に有効な手立てを打てないEUに対して, ローカルの抗議に直面しながらも, スロヴェニア政府は国境バリアを2016年9月現在も継続している。予測困難な不確実性が増大するグローバル社会において, 「国家の退場」とは反対の「国家の再登場」とでもよぶべき事態が進行している。スロヴェニア政府は「移民・難民問題」という架空の「非常事態」を布告し, その定義を前提として, 国境管理を強化させた。グローバル化した社会における国家のスタンス, とりわけ物理的な暴力のみならず, 「象徴的な暴力の正当な独占主体としての国家」(ピエール・ブルデュー)を国境地域のうごきから究明する必要がある。

最後に, 国境バリアに対する抗議の沈静化をどう理解したらよいだらうか。抗議という「可視的な動員局面」は沈静化したが, かといって運動が消失したわけではなく, 次への抗議を可能にする「潜在的な運動局面」(アルベルト・メルッチ)に入ったと捉える必要があるだろう。

付記: 本稿は以下の2つの研究成果の一部である。(1)「『国境の市民化』をめぐるローカルの重層的展開—日伊比較地域アプローチ」(研究代表者: 鈴木鉄忠, 2015-2018年度, 若手研究B, 課題番号15K17206), (2)「“惑星社会”の問題に応答する“未発の社会運動”に関するイタリアとの比較調査研究」(研究代表者: 新原道信, 2015-2018年度, 基盤研究B, 課題番号15H05190)。

